Sonoda Women's University

園田学園女子大学論文集　第41号（2007.1）

カナダでの在外研究を終えて

浜　口　　尚

筆者は2004年３月１日から８月31日まで園田学園女子大学在外研究員としてカナダ、モントリオール市にあるマギル大学に滞在、個人研究に従事してきました。本稿は筆者自身による学内での口頭報告「カナダでの在外研究を終えて」（2004年９月24日、園田学園女子大学５号館３階大会議室）をほぼそのままの形で文章化したものです。当日報告を聞いていただいた教職員の皆様方にお礼申し上げます。

1.は　じ　め　に

まず初めに私がモントリオールのマギル大学に行くことができたのはどういう理由によるのかということを簡単に説明します。本学においては「海外研修に関する取扱要綱」というのが平成４年４月16日付で制定されています。これは従来からあった在外研究および海外研修にかかる要綱を一本化したものです。そのことは例規集をご覧いただければわかります。今では例規集もイントラ上に公開されています。その要綱第２条第１項に定義、すなわち在外研究員とはどういうものをいうのかが書かれています。第３条第２項に資格、すなわち誰が在外研究員になれるかが書かれています。資格の構成要件は当該年度の４月１日現在で３年以上本学に在職している者となっています。但し、原則として50歳未満となっていますので、50歳以上の方は残念ながらなれないということです。第５条第１項に在外研究期間が書かれています。在外研究には長期、中期、短期があります。長期というのは６か月以上１年未満、中期が３か月以上６か月未満、短期が３か月未満です。第７条には選定について書かれています。誰が選ばれるのか、どういう人が選ぶのかが書かれています。選定は学長、事務局長、３学部長からなる審査委員会の審査の後、教授会の議を経て決まるとなっています。第８条に旅費規程があります。長期が300万円、中期が150万円、短期が50万円を限度に旅費を支出するとあります。但し、第９条において当分の間長期と中期を合わせて300万円、短期が200万円、計500万円と規定されています。私はこの要綱に従い中期在外研究に応募し、運良く選定されたのでした。在外研究を希望される方はこの要綱をよく読んで応募されればと思います。

NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

2．モントリオールとマギル大学

2004年夏、アテネでオリンピックが開催されていましたが、モントリオールでは1976年にオリンピックが開催されました。コマネチが体操で10点満点を連発したのがこのモントリオールのオリンピックでした。もう四半世紀以上昔の話です。最近、モントリオールでは市街地再開発が進み、高層ビルが林立しています。こういう高層ビルの所有者は銀行、証券、生保などで、かつての日本とほとんど同じです。バブル崩壊が起こるかどうかはわかりませんが…。

モントリオールはトロントに次ぐカナダ第２の都市で、人口320万人ぐらいです。大体その３分の２がフランス語を母語とする住民です。さて、大阪からモントリオールへの道順ですが、まず西海岸のバンクーバーに行きます。ここまで飛行機で大体10時間ぐらいかかります。さらにバンクーバーからモントリオールまで５時間半ぐらいかかります。日本人もバンクーバーまでは割りとよく行きますが、東側まではあまり行きません。モントリオールは冬はかなり厳しいところです。夏はその代わり過ごしやすいです。私はこのモントリオールを中心にして、ニューファントランドへ２回、あとマグダーレン諸島へ１回行ってきました。

私がお世話になっていたのがマギル大学です。このマギル大学は1821年にジェームズ・マギルという毛皮商人によって設立された大学です（写真１）。この人はビーバーの皮を売ってしこたま儲けました。儲けたけれども、その儲けを社会にきちんと還元しています。儲けたお金で医学の専門学校みたいなものを作り、それが発展して今日、医学部、歯学部、農学部、人文学部、宗教学部、工学部、理学部、法学部など11学部を持つ学部生２万1000人、院生6000人の総合大学になっています。カナダの大学評価では、10年ぐらい前にはカナダ第１位の評価を取っていたのですが、最近トロント大学に抜かれて２位になりました。またクィーンズ大学、UBCにも追い上げられて、ひょっとしたら評価が４位まで下がるのではないかとも言われています。評価が下がっている理由の一つが留学生の増加です。全学生に対する留学生の比率が学部で17.7%、大学院で24.4%です。留学生比率はカナダ第１位となっています。良いか悪いかはよくわかりませんが、留学生が特に学部で増加すれば、学力が低下し、評価も下がるという現象が起こっています。

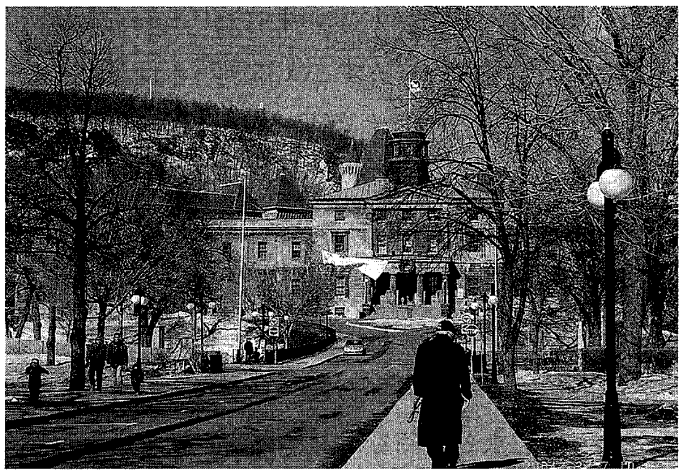
（写真１）　ジェームズ・マギル像と筆者

学校制度は当然日本と違います。学年暦は９月に始まります。秋学期が９月から12月、冬学期が１月から４月までです（写真２）。2004年の秋学期は９月１日から始まり12月３日までです。その後、クリスマス前までが試験です。短いクリスマス休みを挟んで2005年の冬学期が１月４日から始まり４月13日までです。そし

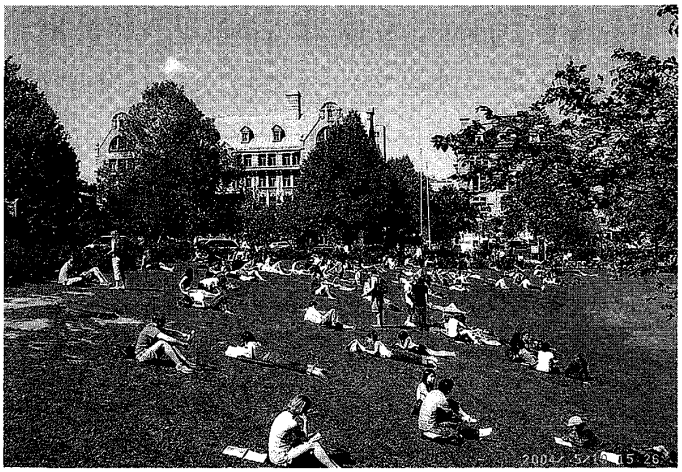
NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

てその後４月末までが試験です。５月から８月末までの４か月間は夏休みです（写真３）。サマーコースなんかもありますが、それを希望しなければ４か月間休みです。この４か月間にアルバイトをして学費を稼ぐ学生もかなりいます。大学院生は休みなしでずっと勉強しています。７月、８月には短期の語学研修コースなども開催されています。日本人向けのコースもあるようです。



（写真２）　冬のマギル大学キャンパス



（写真３）　初夏のマギル大学キャンパス

行ってみて非常に面白かったのが授業時間です。月、水、金が50分授業、火、木が80分授業です。ひとつのコースが１週間に50分授業を３回やるか80分授業を２回やるという形になっています。それで日本でいう３単位分ぐらいになります。但し、80分授業を連続して行う先生もいます。これは講義や演習など授業の性質によって異なっています。この50分授業と80分授業の並立は日本にはない面白い形式でした。こういう授業のやり方も参考になるではないかとも思いました。

学費は日本円に換算してケベック州民が年間25万円、カナダの他州民が48万円、外国人が105万円です。マギル大学は私立の学校ですが、州の補助金がかなり支出されています。それゆえ州民は安くなっているわけです。ケベック州民の25万円は安いと思います。外国人留学生は全学部生の17.7%を占めていますが、東洋系、特に中国、韓国からの学生がかなり多いように感じました。日本人はそれほど目立ちませんでした。中国、韓国からの留学生は日本人よりも一桁は多いです。学費は高いけれども、奨学金とかは別に支給されていると思います。学費を高く設定しても留学生がどんどんきている。羨ましい限りです。

キャンパス内で非常に面白かったのが女子学生の服装です。ムスリムの女子学生も在学しており、彼女たちは当然のことながら長袖長ズボンです。真夏でも長袖長ズボン、頭にはスカーフを巻いています。その横をタンクトップ一丁の白人女子学生が歩いていく。日本では見られない光景でした。ムスリムの女子学生と白人女子学生が二人並んで歩いているのは見かけませんでした。やはり住み分けが行われているようでした。ムスリムの学生はムスリム同士で、東洋系の学生は東洋系同士で、地元の学生は彼（女）ら同士でと住み分けが進んでいるようでした。

そういうキャンパス内で私は人文学部（Faculty of Arts）人類学科（Department of

NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

Anthropology）に所属していました。先ほど述べたように11学部の中の一つが人文学部で、人文学部には16学科があります。人類学科をはじめとして社会学科、経済学科、英語学科、フランス研究学科、イタリア研究学科、スペイン研究学科、ユダヤ研究学科などです。

その人類学科で私は「客員教授」（Visiting Professor）という肩書きをもらいました。「客員教授」と聞こえはよいのですが、実際は無給研究者の呼称のようです。人類学科は文化人類学（cultural anthropology）と考古学（archaeology）の二つに大別されます。コースに分かれているわけではありませんが、教員の専攻はそのいずれかです。教員の採用に関しては、文化人類学の専門領域とそのフィールド、考古学の専門領域とそのフィールドが重要になってきます。カナダの大学ですから北方研究、カナダ北極圏の研究が盛んです。そのほかにも東アフリカを研究している先生、ボルネオを研究している先生もいました。

専任教員の職階は教授（Professor）、准教授（Associate Professor）、助教授（Assistant Professor）の三段階です。准教授以上には終身在職権（tenure）があります。定年制はありませんので准教授以上は自分が辞めたい時まで仕事ができます。助教授にとっては准教授に昇進できるか否かが一生の分かれ目です。昇進すれば自動的に終身在職権が付きます。今まで昇進しなかった人はいないようですが、昇進できない場合は他の大学に移っていくしかありません。人類学科の助教授は３人で、全員まだ若いです。３人とも1999年に博士号を取得し、2002年に採用された方々です。フィンランドで学位を取った方が１名、アメリカの学位が２名です。教員は国際的に採用している感じです。

教育に関しては、大学院教育中心の大学ですので、教員の第一の仕事は、学生にまともな博士論文を書かせて博士号を取らせることです。これが教員にとって最も重要な教育、仕事です。二番目の仕事は、文化人類学も考古学も調査、要するにフィールドワークに基づいて博士論文、修士論文を書くので、その調査費用を指導教官が取ってくることです。学生も当然自分の調査費用を取ってきてくれるであろう指導教官を選びます。私が人類学科に滞在中の７月から８月にかけて博士課程の院生１人、修士課程の院生１人、学部生３人の計５人が考古学調査にカナダ北極圏に出かけて行ったのですが、指導教官が真っ先に買い与えたのがライフル銃２丁でした。調査地ではホッキョクグマが出て危ないので、護身用のライフル銃が必要です。そのライフル銃を購入する予算を取ってくるのも教員の仕事です。

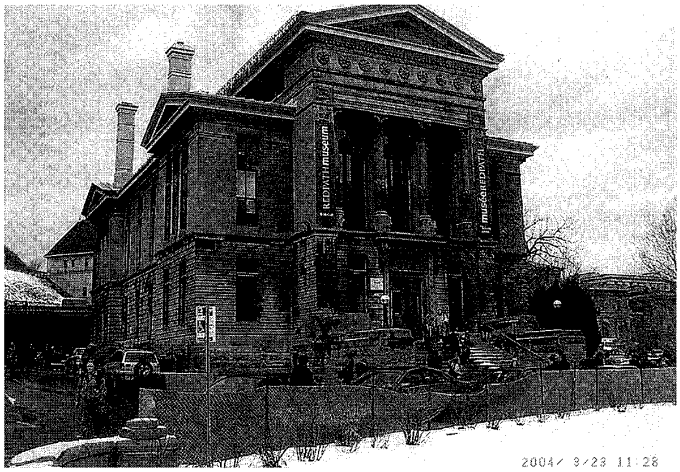
マギル大学はモントリオールの中心街にあり、私は大学から徒歩５分ぐらいのところにあるアパートの一室を借りて住んでいました。アパートから大学の通用門まで５分、通用門から人文学部棟まで５分、そこから研究室までまた５分かかるという所で勉強していました。町の中心にある大学なので、衣食住の全てが徒歩10分、15分で完結してしまいます。だから出歩く必要がほとんどありませんでした。私の専攻は文化人類学ですが、マギル大学では考古学の先生にお世話になっていた関係で、考古学研究室の一室を間借りしていました。狭い所でしたけれども贅沢は言えないので、そこをお借りして研究していました。

大学は総合大学ですので、学内には色々な施設があります。その一つがレッドパス博物館とい

NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

う日本の旅行ガイドブックにも掲載されているぐらい有名な博物館です（写真4）。学生のみならず、観光客にも開放されています。もちろん無料です。日本の鎧兜、エジプトのミイラ、貝殻や水晶、動物の剥製と、何でもありの博物館、ナチュラリストのための博物館という感じでした。こういう施設が学内にあって、学生が自由に出入り出来る。ここがすばらしいところです。学生が自由に入って、色々なものを見て、その学問に興味を持つきっかけとなる仕組みです。本学にもオセアニア関係の資料が多数あるのですから、そういうものを有意義に使ったならば、あるいは関心を持ってもっと勉強を深めていく学生も出てくるのではないのかと思います。



（写真4）　レッドパス博物館

（写真5）　学内のオープンカフェ

夏になれば学内にオープンカフェが登場し、外部の方も入ってきて学生と共に短い夏を楽しんでいます（写真5）。またマギル大学書店の2階にはスターバックスが入っています。学内に16ぐらいレストランとか喫茶店があります。スターバックスのような世界的に有名なカフェから、カナダでは人気を誇るティム・ホートン、それに家族3、4人で経営している同族店も入っています。学部棟毎に特徴のある店舗が入っています。スターバックスのコーヒーは一番高いですが、一番美味しいです。税込み1ドル45セント、120円強です。一番安いのがティム・ホートンのコーヒーで1ドル10セント、90円強です。ティム・ホートンは安いが薄味です。私は濃いのが好みです。大学に行ってコーヒーを飲むのが楽しみの一つでした。

3．捕鯨からアザラシ漁へ　―個人研究テーマの新展開―

従来私は(1)捕鯨文化の比較研究、(2)生物資源の持続的利用および管理、(3)観光開発と地域振興、この三つを個人研究のテーマとしてきました。熱帯のカリブ海地域を主たる調査地としてこれらの事柄を研究してきました。今回はこれらの研究テーマの視野を広げ、比較材料を得るために寒冷地域を調査対象地に選んだ次第です。

1991年以降、私はカリブ海のベクウェイ島という人口5000人ぐらいの小さな島で捕鯨文化の調

NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

査に従事してきました。ベクウェイ島まではニューヨークから飛行機で6時間ぐらいかかります。そこはカナダとは全く違う環境です。カナダの冬は寒すぎますが、ベクウェイ島の夏は暑すぎます。ニューファンドランドのアザラシ漁師は海に落ちれば7秒で死ぬと聞きました。ベクウェイ島の鯨捕りは海に飛び込んでザトウクジラを仕留めます。非常に対照的な自然環境です。そこで私は捕鯨ボートに乗りながらザトウクジラを追いかけていました。もちろんザトウクジラも何度か食べました。そういう過去でした。

ここで質問が2問あります。質問(1)「日本における鯨・イルカ類の捕殺数は何頭ですか？」。質問(2)「カナダにおけるアザラシ類の捕殺数は何頭ですか？」。答えは次のとおりです。日本では2002年に鯨・イルカ類が12種類、1万9015頭が捕殺されています。そのうちマッコウクジラの5頭を除いたほとんど全てを食べています。だから1万9000頭以上の鯨・イルカ類を食べていることになります。ではカナダではどれぐらいのアザラシが捕殺されているのでしょうか？　これは商業捕殺分だけです。先住民が生計用に獲っている分は除いています。2002年に31万4540頭のアザラシ類が商業目的で捕殺されています。そのうちタテゴトアザラシが31万2367頭です。捕殺数の99%超がタテゴトアザラシです。今年2004年の速報値ですが、35万2000頭のタテゴトアザラシが捕殺されています。これは毛皮のためだけの捕殺です。肉は胸鰭肉を除いてほとんど利用されていません。これがカナダにおける資源利用の一形態です。そういう資源利用について私は勉強してきました。

以下、タテゴトアザラシについて少し詳しくみていきます。誕生後10日から2週間までのタテゴトアザラシが「ホワイトコート」と呼ばれています。その名のとおり純白の毛皮をしています。誕生後3週間以降の完全に毛の生えかわったタテゴトアザラシが「ビーター」と呼ばれています。産毛が生後2週間から3週間で生えかわり、ビーターになります。1982年まではホワイトコートを捕殺していました。ところがこの純白の仔アザラシを捕殺するのは可哀想だという団体が反アザラシ漁運動を始めました。反アザラシ漁運動の詳細は省略しますが、カナダ産アザラシ製品のほとんどを輸入していたEC諸国は1983年にホワイトコートの輸入を禁止しました。その結果、カナダにおけるタテゴトアザラシ漁は壊滅に近い状態に追い込まれました。その後、捕殺対象をホワイトコートからビーターに変え、20年以上かけて市場開発を行い、現在では30万頭以上を再びヨーロッパ諸国に輸出できるようになりました。現在、ロシア、東欧諸国、すなわち旧東ドイツ、ポーランド、ルーマニアなどにおいてアザラシ皮製品がブームで売れ行きは好調です。結構な話です。

ホワイトコートは誕生後10日から2週間まで、ビーターは誕生後3週間以降、双方同じタテゴトアザラシで生物学的には違いはありません。しかし、欧米人にとってはホワイトコートの捕殺は可哀想となり、ビーターではそうなりません。両者の違いは見かけだけです。まだ乳離れせず母親と一緒にいるホワイトコートを殺すのは可哀想。それが乳離れして独り立ちしたビーターだと構わない。随分おかしな話です。反アザラシ漁団体がビーターも救おうと運動をしても一般市民はあまり共感しません。まぁ、簡単に共感されれば、それはそれで困るのですが…。

NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

カナダといっても商業アザラシ漁を行っているのは一部の地域だけです。ニューファンドランド北東岸沖とセントローレンス湾内のマグダーレン諸島周辺です。この2地域で全捕殺数の97%を占めています。残りもセントローレンス湾一帯で捕殺されています。結局のところカナダにおいて商業アザラシ漁にかかわっているのはニューファンドランド州、ケベック州、プリンスエドワード州、ノバスコシア州、ニューブランズウィック州の東部5州だけです。西海岸バンクーバーの住民にとってカナダで商業アザラシ漁が行われているとは信じられないことです。タテゴトアザラシを年間35万頭以上も獲っているとはもっと信じられない…となります。最高級品質のビーターの生皮の売り渡し価格は1枚55ドル。日本円で約4700円。結構な額になります。冬から初春にかけて海が氷結、漁業が不可能となるニューファンドランドやマグダーレン諸島の漁師にとっては必要不可欠な現金収入源となっています。

（写真6） ニューファンドランド州、セントジョーンズ

（写真7） 捕鯨・アザラシ漁博物館

そのアザラシ漁の中心地ニューファンドランドへ私は2回出かけました(写真6)。ニューファンドランドの州都セントジョーンズから車で1時間のところにサウスディルドという人口350人の小さな町があります。ここには「捕鯨・アザラシ漁博物館」という私の研究テーマにぴったりの博物館がありました（写真7)。サウスディルドでは1972年ぐらいまで捕鯨が行われており、現在でもアザラシ漁が行われています。こういう伝統があるところです。ここでは日本の大洋漁業が1969年から1972年までの4年間に1200余頭の鯨を獲ったという記録が残っています。捕鯨との関係で日本との繋がりもあるところです。

一般的にはアザラシ肉はほとんど利用されませんが、ニューファンドランドでは少量のアザラシ肉が食べられています。セントジョーンズの食品スーパーに立ち寄ったのですが、そこではアザラシ肉ソーセージ（シール･ソーセージ）が売られていました（写真8)。あとアザラシの胸鰭肉（フリッパー・ミート）もありました。胸鰭、ここが一番美味しいんです。絶えず動かしているから。鯨の尾の身と一緒です。現地の人はここしか食べません。私もアザラシの胸鰭肉入りのミートパイを食べました。味はよくわかりませんでした。

NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

今回は大学から研究費をもらってマギル大学でアザラシ漁に関する文献研究を行ってきました。これを基礎にして来年度以降、科研費で現地調査を実施して、アザラシ漁の歴史、現況および課題についてまとめる予定です。幸いにして2005年度、2006年度に科研費がもらえますのでアザラシ漁の現場を見ることが可能です。今後は捕鯨からアザラシ漁へ研究対象を徐々に移していこうと考えています。

（写真８）　アザラシ肉ソーセージほか

４．カナダで考えたこと　―まとめにかえて―

30分過ぎたので簡単にまとめます。ここからは世迷言ですから軽く聞いてください。帰路バンクーバーからエアーカナダ便に乗ったわけですが、その機内に食料を供給する会社がスト中ということで、機内食はサンドイッチ１個とカップラーメン１個だけでした。行ってみてわかったのですが、公務員、民間を問わずカナダではストが頻発しています。６月と８月に２回ニューファンドランドへ行きましたが、６月に行った時に４月から電話会社がスト中だと聞きました。８月に再訪した時もまだやっていました。そんな感じでした。帰る直前には国立公園を管理する公務員労組がストに入りました。日本と違って鉄道は国鉄、郵便も民営化の方向はありません。そういう理由で結構ストが多いのかもしれません。

現地でカナダ滞在30年、会社経営20年という日本人にお会いしたのですが、「カナダは非常に自然環境に恵まれている。天然資源も豊かである。人も優秀。でも何でこんなに非効率なのか。イライラする」と話されていました。実際そういう感じであるということが少しはわかりました。非効率というのを。一番身近な事例がマギル大学人類学科の事務室です。ここの事務室は学期中の執務時間は午前９時から12時まで。12時から２時までの２時間は昼休みで事務室の入り口に鍵がかかり、入れません。そのあと２時から５時までが午後の仕事となります。ところが、夏休みになると金曜日も休みになり、しかも４時半で終わります。従って、執務時間は月曜日から木曜日までの午前９時から12時、午後２時から４時半となります。これに慣れなかったら非常に不便ですが、慣れたら別に何ともありません。夏休み中は、木曜日の午前11時45分ぐらいに事務室のメールボックスの前に行けば、ほぼ会いたい先生に会えます。それは木曜日の午前中に来なければ、郵便が３日間受け取れないということになるからです。そういう形で誰かに会いたければ、木曜日の午前11時45分ぐらいに事務室に行けばよいのです。ひとつの慣れです。現地に適応した生活も送ってきました。

NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

これは私の印象で具体的な根拠はないのですが、一般的なカナダ人は持てる力の6割ぐらいしか出していません。6割ぐらいの仕事しかしていません。あとの4割はどうかといえば、誰かがカバーしているわけです。その誰かがカバーすることによってその人たちに仕事が回り、結果としてワーク・シェアリングになっています。カナダも結構移民が多いのですが、アメリカのように民族集団間の対立は多くはありません。カナダ人があまり働かないので、移民に仕事が回っていく。そういうことがいえるのかもしれません。

では6割しか働かないのに国が回っていけるのかといえば、回っていけます。なぜ回っていくかというと税金が高いからです。売上税が大体15%です。モントリオールのあるケベック州は国の売上税が7%、州の売上税が7.5%、計14.5%です。一番高いプリンスエドワード州では、国の売上税が7%、州の売上税が10%、計17%です。それに法人税も個人の所得税も高いと聞きました。税金が高いから働かないのか、働かないから税金を高くしているのかはよくわかりませんが、とにかく税金は高いです。しかし、税金が高い分、例えば先ほど述べたように学費は安いです。ケベック州民は7.5%の地方売上税を払っている代わりに、私立のマギル大学にも25万円で行けるわけです。高い税金を払っている代わりにその見返りもあるわけです。基本的にカナダは医療費も無料です。半年以上滞在している方は、ある程度保険料を支払ったならば医療費は不要です。アメリカの事例をみれば、低税率とか減税というのは一部の富裕階級をより裕福にするだけで、一般庶民には恩恵はないことがわかります。これに対してカナダでは高い税金が失業率を下げているわけです。税金が高いから働かないのか、働かないから税金が高いのかはよくわかりませんが、結果として一般的に6割ぐらいの力でしか働かないから、あとの4割に関して、アメリカに行けば失業するような人々がそれなりの仕事を得て、それなりの給料を得ているわけです。それに学費も医療費も安く、社会保障も完備されているから、6割ぐらいの労働で生活していけるわけです。そういう状況です。

アメリカとカナダの違いに関して面白かった事例が二つあります。一つは薬代、薬価です。実はカナダで読んだ記事で、帰ってきてから日経にも掲載されていましたが、北米の同じ製薬会社の同じ工場で作った同じ薬が、アメリカではカナダよりも3割から8割高くなります。何故かといえばカナダの薬価は政府の公定価格だからです。政府が値段を決めているから安いのです。アメリカでは民間会社の自由価格だから高い。それゆえアメリカ人は違法を承知でカナダから薬を個人輸入しています。薬自体の安全性には問題がないわけですから、個人輸入を禁止する法律というのはアメリカ国民の安全のためではなく、製薬会社の利益を守るための法律であるということがわかります。アメリカ人もその辺の事情はよくわかっていますから、違法にもかかわらず個人輸入するわけです。

もう一つ面白かったのが、カリフォルニア州のウォルマートの事例です。これはCNNで報道されていた話です。ウォルマートは世界で一番安い商品を売る総合スーパーですが、どうして世界で一番安く売れるのか？　その理由は簡単、人件費が安いからです。人件費が安いから商品の価格も安い。あまりにも給料が安すぎるので、ウォルマートの従業員の中には給料だけでは生活

NII-Electronic Library Service

Sonoda Women's University

できず、カリリフォルニア州の食料チケット援助を受けている人もいます。その食料チケット援助に対してカリフォルニア州民がかなりの税金を払っているわけです。ウォルマートの従業員の給料があまりにも安いので、給料だけでは生活できず、生活保護に近いような食料チケット援助を受けている。それはカリフォルニア州民の税金から支出されるものです。だから、安いものを買っているつもりのカリフォルニア州民は、実は高いものを買わされているわけです。やはり価格というものは適正な水準で設定される必要があります。労働者の給料をも反映した形で設定されなければならないということです。労働者の生活まで考えた価格設定をすれば、世界一安くはならないはずです。

同じ自由と民主主義を標榜するアメリカとカナダですが、半年間カナダで暮らしてみて、北緯49度の北と南でこの自由と民主主義が全く違うということ実感してきました。どちらの社会をめざすかは皆さん自身で考えて下さい。高い税金を払っても皆がある程度豊かなそれなりの生活ができる社会がよいのか、それとも安い税金で一人勝ちの社会がよいのか。私はあえて答えを言いませんが、私の意図することは大体わかっていただけたと思います。どうも有り難うございました。

[はまぐち　ひさし　文化人類学]

NII-Electronic Library Service